

i・tem算数 Newspaper

今年度から高学年でitem算数をご採用いただいた弦巻小学校にお話を伺いました。

福留校長先生はitem算数発刊当時よりご存じいただいております。item算数の歴史も含んだ内容となっております。是非、ご一読ください。

世田谷区立弦巻小学校

学校長 福留 修一先生(写真右)

算数少人数ご担当 佐藤 周平先生(写真左)



学校全体での学力向上の取組と

算数教育の重要性

Q、itemを5、6年生で使っていただきありがとうございます。弦巻小学校で目指している学力向上に対しての取組と、算数という教科の重要性の観点から、どのような経緯でitemを取り入れていこうと考えたのかお話しいただけますか。

A、福留校長先生

まず初めに、算数の学力という観点ですが、現在、様々な新しい学び方が提唱されていて、2030年度からの新しい学習指導要領の論点整理でも「質の高い探究的な学びの実現」が示されているように、学習を深めていくことが大切な要素になると考えています。そのような新しい学びの中で、子供たちが自分で考えて学習を進められる力がより必要になると考えています。残念ながら、それが今、全面的に展開できているわけではありませんが、目標としては根底にその考えがあって、やはり子供たちには考える楽しさだとか、その教科そのものの楽しさ、例えば算数という数学的な楽しさですとか、学習の楽しさを味わってほしいと思っています。その点を踏まえ本校では、校内研究や授業改善については、「伝え合い、学び合う児童の育成」を目指して、主体的、対話的な深い学びの実現のために授業を設計しています。その目標に向かって、実際に授業時に何を大事にしていきたいかと考えていたところ、item算数にちょうどリンクする部分がありました。

福留校長先生とi・tem算数の出会い

福留校長先生

私はitem算数が発刊された当初から出会うことができました。当時私は、副教材として「ドリル」ではなく、「問題集」を探していました。その最中に筑波大学附属小学校算数部の研究会へ参加した際に、書籍コーナーでitem算数に出会い、これは最適だと思い次の年から採択させていただきました。一番のポイントは、子どもたち一人一人の学習欲求に対応できる内容であるという点です。

今でいうと「個別最適化学び」をこの1冊で進められるということが最も魅力的な部分でした。一律に全てのページを解くことはせず、自分で選択して取り組めるという点と、自分で考えて楽しみながら進められる点が、item算数を活用する利点であると思っています。算数科では、習熟度別指導を行っていますが、児童にとって個々の充実性が重要だと思っています。今回item算数を5、6年生で採択しましたが、ノートの取り方や使い方も含め、いわゆる授業改善の一環としてitem算数を活用しています。item算数を使用する中で、子どもたちの学力を高めていきたいということが目標です。筑波大学附属小学校算数研究部の先生方は時代の流れもある中で一貫して、解決したいという意欲や児童のモチベーションなどを上手く引き出して、それをみんなで共有して広げていくところは、以前からも継承されていると思います。

まさに今の時代に必要な学びにマッチしているという印象です。児童個々で学習するだけでなく、みんなで伝え合う、学び合う、そのようにして学力を上げていきたいと考えています。



若手教員の課題と授業改善

Q、若手の先生方が抱えている共通の『課題』がありましたらお話しいただけますか。

A、福留校長先生

今の若手の先生方が指導している環境は、自分の若い頃とは随分変わったと感じています。まず一つは、自分が若い頃はもう少しゆっくり育って良かった時代でした。しかし今はある程度、学習指導や学級経営の成果を保護者からも、子供たちからも求められる。私が若い頃は休み時間に楽しく遊んで、先生と児童に信頼関係があれば授業が多少未熟であってもある程度の学級経営はできていたと思っています。

現在は授業力が「教師力」の中で非常に大きな要素となり、コミュニケーション能力だけでは学級経営が成り立たない厳しい状況であると感じています。その中でも若手の先生方は良い授業をしたいという思いをもち、授業力向上のために一生懸命努力しています。しかし、保護者対応や児童対応のように、授業以外の様々な仕事も増えていますし、カリキュラムの授業時数が限られている状況の中で、より授業の準備に掛ける時間が必要になりますが、それを捻出できず悩んでいます。また、放課後の時間がなかなか取れないという状況もあります。更にその中に会議や、打ち合わせが入るため、自分一人で考える時間や、あるいはあることをじっくり考える時間が取りにくくなっているというのは、環境的に厳しい部分であると思っています。加えて言うと、基本的な内容の授業の形を初めに学びますか、そこには、たくさん大事なことがあると考えています。例えば、学習の「めあて」を、教師から発信するのではなく、子供たちと一緒に作り上げていく、または自力で解決させる場面を必ず作る、そして学習のふりかえりをどうするかなど、ベーシックな授業を作るのも奥が深いです。さらに今求められている「自由進度学習」や「探究的な学習」、「ICTの利活用」などの新しい指導方法も加わってきている中で、授業力をどのように向上させるべきか。若手の先生方は苦勞することが多いと思っています。そのような中でも失敗は恐れないでほしいと思っています。失敗から学ぶことも多々あります。失敗を恐れるあまり、次の壁が越えられない。授業は、ある程度、失敗の積み重ね、つまり「トライアンドエラー」の積み重ねで上達していくものだと思います。しかし、現実的には失敗しないようにという意識が強く、チャレンジを恐れている面があると感じています。その中でも、先生方は子供たちに学習を楽しんでほしいと思っていますし、先生方も授業づくりを楽しめるように、管理職として何かできることはないかと日々悩んでいます。



学校の目指す算数授業と「i・tem算数」

Q、佐藤周平先生は算数専科でいらっしゃいますが、1年、2年先を見通した際に、目指している授業像はございますか。

A、佐藤先生

福留校長先生から「楽しい授業づくり」を学校の目標として掲げられていますので、まずは算数の面白さを感じられることを目指しています。また生活の中で算数が役立つ場面があると気づかせること。そして算数を通して友達同士と関わり合ったり、学び方を身に付けたり、算数を通してそのような交流が生まれることが理想です。授業が終わった後に、算数を通して身の回りのものが違って見えてきた、つまり『算数の眼鏡』が、その子の中に生まれてきたら成功だなとは私は思っています。そのためにはやはり算数は楽しいと思ってもらえる授業をしなければならないと意識しています。

Q、授業の中でitem算数が佐藤先生のお考えとリンクする部分はどのようなところでしょうか

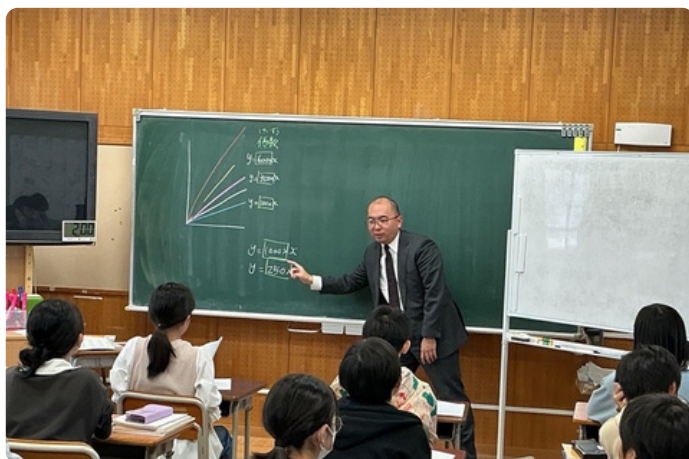
A、佐藤先生

普通のドリルと比較して、問題の種類が豊富にあるため、教科書の問題を扱ったとしても、その後で「こういう聞かれ方だったらどう考えるかな」という教材研究に活用することが多いです。子どもたちがどれほど算数を理解できているか、そのラインを確かめる時にitem算数が使いやすいと思っています。習熟を図るときには「習得」・「活用」・「探究」のどこからスタートするかは自分で選んでいいよ。」というように指示しています。「全部をやらなくていいよ。」という声掛けもしています。それでも子どもたちは内心、全部終わらせなければならないという考えが強いので、「3学期のまとめの振り返りの時などに、またやればいいよ。」という伝え方をしています。子どもたちに「どこからスタートするかを決めていいよ。」と言うと、自分から進んで解いてみたい問題を探して解く姿が見られます。

算数専科 佐藤周平先生



「i・tem算数」の特徴と子どもたちの反応





Q, 以前に使用していた教材と比較して、item算数はどのような印象ですか。

A、佐藤先生

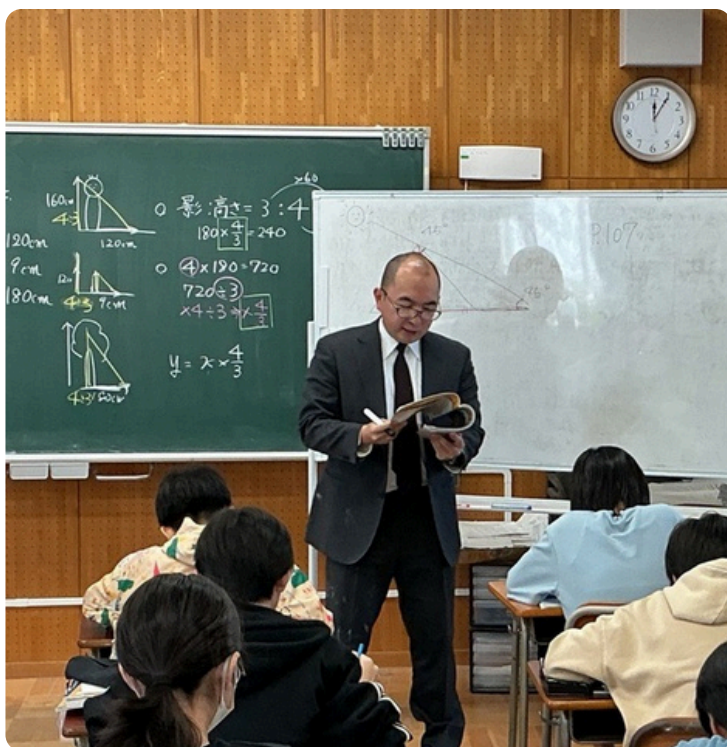
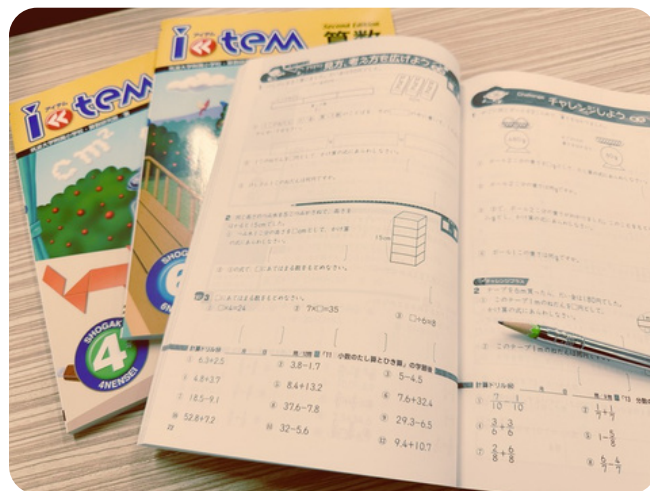
例として5年生のお話ですが、繰り返し同じ問題ばかりやらなくていいから楽しいと言う子は何人もいる印象です。特に発展コースの子は同じ計算を繰り返し解くことに意欲が下がってしまう子どもたちも多いです。苦手な子も同じように、解き続けることはつらいようです。練習の量としてはちょうど良いと思っています。子どもは、短いスパンで次のステップに進めることが楽しいようで、難度（レベル）の区切りが分かりやすいというのは、大きなメリットと感じています。

「i・tem算数」の活用法と評価

Q, i・tem算数を宿題として使う場面はありますか。

A、佐藤先生

「いつまでに、ここまで終わらせよう」という形で宿題を出しています。授業中で扱っていても終わりがきらない子がいる場合は、追いつくために宿題を出すこともあります。丸つけは児童が自分でやっています。特に六年生になると大体は自分で丸付けまでできます。丸付けの確認は教師がでチェックしています。電子書籍版item算数（eTEXTweb）も併用しているので、eTEXTwebの解答解説を用いて自分で丸付けさせています。初めは子どもに答えを持たせていると、「答えをみてしまうのではないか。」と悩んだのですが、解答解説をなくしたり、忘れたりすることもあったので、eTEXTwebを併用してからは自己採点がしやすい環境になったと思います。



Q, 「授業でわかる」や「スペシャルアイテム」はどのような場面で使用していますか。

A、佐藤先生

単元の学習の最後に、「終わった人はここもやってみよう」と声掛けしています。更にもう一歩ステップアップできるコーナー（チャレンジ的な問題）として取り扱っています。夏休みの宿題としても使えますし、子供たちの学習スピードに合わせていつどのように扱うかは、その都度決めています。

A、福留校長先生

画一的なドリルの問題集を使っていると、もっとレベルの高い問題を解きたいという学習意欲に応えられません。それまでは先生が別途、発展問題を作らなければならないという負担がありました。類題プリントの「itemプラス」なども提供されているので、プリント準備の負担軽減になっており、働き方改革にも繋がっていると感じています。チャレンジ問題は確かに少し難しい印象ですが、子どもたち同士で問題と一緒に解く姿も見られ、良い意味で競争にもなりますし、どうやって解いたの？と一緒に課題解決する場面もありました。子どもたちの繋がりが確かに変わってきた印象です。一緒に考えて解くにはちょうど良いレベルで、ヒントを与えあったり、答えを教えあったり、子どもたち同士で工夫して解いている姿は大きな変化であると感じています。

Q, 佐藤先生が目指す子どもたちの理想像はどのようなものでしょうか。

A、佐藤先生

算数の学び方がわかっていると、算数について話をしているうちに仲良くなったり、算数の話で相談し合ったり、算数を通じて友達同士で豊かな関わりを作っています。算数だけではなく、関わり方を育て「人間力」につながっていくような授業にしていきたいと考えています。

編集後記

世田谷区立弦巻小学校で取材をさせていただき、学校の目指す「楽しい授業」を合言葉に先生方が一致団結し、授業計画を立てていました。子どもたちが目を輝かせる場面は「分かった」という達成感と「自分でもできる」という自己肯定感が伴う瞬間であり、それはまさに成長の瞬間でもあると取材を通して理解できました。お忙しい中、長い時間を割いて取材に応じていただいた先生方、本当にありがとうございました。